

# 登山月報



K 2 (8,611 m)



これからのJMSCA 中期経営計画 .....	2
第147回 Mountain World .....	6
<b>新連載</b> Enjoy Climbing .....	7
令和2年度登山普及情報交換会報告 .....	8
山の自然環境を考える(その1) .....	10
令和2年度全国理事長会議報告 .....	11
JMSCA、寄贈図書、表紙のことば、編集後記 .....	12

# これからのJMSCA 中期経営計画

公益社団法人日本山岳・スポーツクライミング協会（以下JMSCAと呼びます）は、登山、スポーツクライミング、山岳スキーの3つの競技団体を統括するスポーツ団体でも珍しい中央競技団体、National Federation（以下NFと呼びます）です。

2016年8月4日、国際オリンピック委員会（IOC）が、2020年の東京オリンピックにスポーツクライミングを正式に追加競技種目とする決定をしました。JMSCAはこの決定を受けて（公社）日本山岳協会から現在の名称に改称し今日に至っています。

その間、東京五輪推進室、ガバナンス委員会を設置し、規程類の整備を進め、登山部、スポーツクライミング部の委員会を拡充し、常務理事会の月次開催による審議事項の決議迅速化など、JMSCA運営の組織的改善を図りました。人事面では、外部理事、女性理事の登用を積極的に推進し、理事構成の多様化に取り組みました。

財政面においては、中央競技団体における財政の自立性を高め、得られた収益をさらなる普及・マーケティングや競技力強化、ガバナンス強化などに再投資することで持続性のある団体活動を目指しています。

2019年6月10日、スポーツ庁により中央競技団体向け「スポーツ団体ガバナンスコード」（以下GCと呼びます）が制定されました。JMSCAにおきましても、このGCに基づき、中長期経営計画の内、2021年～2025年の5年間の中期経営計画を策定しました。

中期経営計画書策定にあたっては、JMSCAの経営を支えるステーク・ホルダー（利害関係者あるいは団体）の皆様からJMSCAの経営方針、組織、人事、財政などスポーツ庁のGC原則に基づき幅広いパブリックオピニオン（意見）を収集し、分析し、5か年経営計画に盛り込みました。

ご意見を頂戴したのは、5つの関連団体、JMSCA加盟団体そしてJMSCA役員、選手・コーチの方々です。

以下は、JMSCA中期経営計画の骨子をまとめたものです。詳細はJMSCAホームページをご覧ください。

## 中期経営計画のビジョン

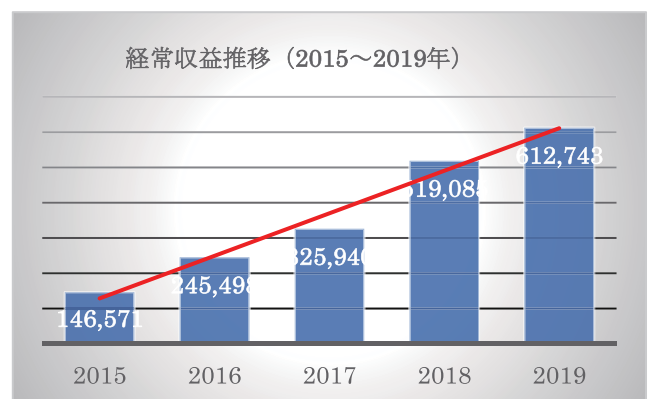


ビジョンはJMSCAが今後5年間進むべき「道しるべ」です。ミッション（使命）はビジョンを達成するための果たすべき役割です。ビジョン・ミッションから導きだされるのがバリュー（価値向上）です。

この目標を達成するには、具体的な取組方針（戦略）の策定と実行が必要です。例えば、登山者登録制度、選手登録者数増、登山・スポーツクライミング愛好者増、権利収益の拡大、新規協賛企業の獲得などです。さらに各委員会のより積極的な活動が必要です。

## 5年間の経常収益の推移予測

2016年に発表された2020年東京オリンピック大会へのスポーツクライミング競技採用を受けて、協賛企業からの協賛金、受取補助金、助成金が急激に増加しました。



今後5年間の経常収益は、コロナ禍およびオリンピック延期でスポンサー企業、受取助成金、補助金、寄付金等の予測を立てるのが困難な状況となりました。しかしながら、2024パリ・オリパラ大会に向けて経常収益は徐々に回復基調と予測とし、下記のような数字



を中期経営計画に盛り込みました。全体的には近似値グラフが示す通り減少傾向にあります。



この推移予測値を維持あるいは増加させるには、前項で述べた多くの戦略を企画し、実施していかなければなりません。同時に、従来の各種事業の見直しと新規事業の開拓、徹底した予算執行管理体制の確立が重要です。

## これからの行動指針

下図は、JMSCAが掲げた理念、使命、価値に基づいて、中期経営計画を進めるために立てた行動指針です。



この5つの行動指針と価値向上目標に向かって登山部、スポーツクライミング部は事業展開を行っていきます。

これらの事業展開でJMSCAは次のような価値向上を目指します。

## 役員構成と人材育成

スポーツ庁のGC原則2では「組織の役員および評議員の構成等における多様性の確保を図ること」、「外部理事の目標割合(25%)及び女性理事の目標割合(40%以上)を設定するとともに、その達成に向け具体的な方策を講じること」と定められています。現在(2020年度)の役員構成は、理事総数23名の内、外部理事3名(13%)、女性理事2名(9%)と指針より低い状況です。2021年度の役員改選で、この指針に出来るだけ近づけ、2023年の役員改選時に目標値を達成できる

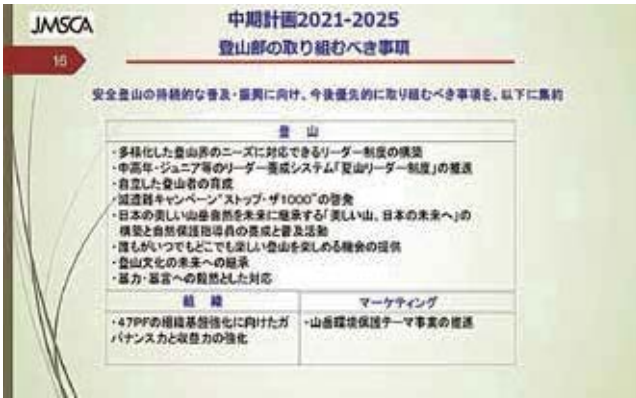


ようにします。さらに、役員定年制度、理事継続年数の制限等も規程化し整備する必要があります。

それでは、登山部、スポーツクライミング部の今後5年間の活動計画を見てみましょう。

## 登山部の5年計画

中高年登山者の増加と並行して若年登山者が増えています。しかしながら、JMSCA加盟団体(47都道府県山岳連盟・協会)に加盟している山岳会の高齢化をはじめ、組織化されることを嫌う若年層が多く、登山者の組織化が進んでいません。また、加盟団体の一つである、全国高等学校体育連盟登山専門部(高体連登山部)の部員が高校卒業後、登山を止めてしまうことも懸念事項です。



一方、山岳遭難事故は中高年を中心に増加傾向にあります。山岳スポーツを統括するJMSCAでも「減遭難キャンペーン“ストップ・ザ1000」による登山者啓発運動、あるいはUIAA基準に則った「夏山リーダー制度」を導入し全国展開を図っています。



## スポーツクライミング部の5年計画

大きな目標は2020東京オリンピック大会、2024パリオリンピック大会でのメダル獲得です。ボルダリング競技においてはすでに厚い選手層を有し、世界に肩を並べる強豪国ですが、リード、スピードの選手育成、強化はこれからの課題です。

オリンピック大会におけるメダル獲得は、スポーツクライミングのスポーツ界における地位向上と、国民への知名度を高め、より多くの協賛金、受取助成金、補助金、寄付金等の増額が望め、さらなる若手スポーツクライミング選手の発掘、育成、強化へとつながります。

スポーツクライミング部は、競技、技術、強化、国体、クライミング普及、マーケティング、スポーツクライミング医学、クライミング国際、アスリートの9委員会を擁し、日々選手の発掘、強化、国内外の競技大会への派遣などに専念しています。



次に2024パリオリンピック大会へのマイルストーンを示します。



このマイルストーンに沿ってスポーツクライミング部はマーケティング戦略を立てて実現へ向けて活動します。

また、日本オリンピック委員会(JOC)あるいは国際スポーツクライミング連盟(IFSC)などとも協調し、公明正大な選手選考やスポーツ選手として必要なガバナンス教育を今後も継続して行っています。

以下の3枚のスライドで戦略を紹介します。







この3枚のスライドに示されているように、2020年までに展開したマーケティング戦略をより洗練化し、拡大し、実効性をもたせなければいけません。

スポーツクライミングはまだ歴史が浅く、若いスポーツ分野です。スポーツクライミング人口のすそ野を広げる必要があります。このために、選手発掘、育成に多大な貢献をしているクライミングジムとの協調活動は今後の重要で必須の課題です。

将来有望な選手を発掘し、国内外のスポーツクライミング大会へ積極的に派遣し、経験を積んでもらい、今後のひのき舞台で活躍できる環境を整えることも必要です。そのための指導者の育成あるいは競技大会への選手と帯同スタッフ派遣費用の捻出もこれからの財政的課題です。

## ガバナンスコードの遵守

スポーツ庁からのガバナンスコード（GC）に沿っての業務運営は重要です。これからの5年間の経営計画につきましても、GCを遵守し、積極的経営展開を行ってまいります。

現在のJMSCAのGC対応状況につきましては、ホームページにて開示しておりますので、以下のURLからご確認ください。

<https://www.jma-sangaku.or.jp/?ca=70>

## パブリックオピニオンへの対応

冒頭に述べましたように、JMSCA中期経営計画の策定にあたっては、多くのステークホルダーの方々から貴重なご意見を頂戴しました。数多くのご意見の中から、これからの5か年計画に取り入れて行くべき事項を以下にまとめました。



## 終わりに

登山界は登山者の組織離れが進み、JMSCAをはじめ多くの山岳団体がその存続基盤を脅かされています。山岳団体が大同団結して現状を打破しなければいけない状況と言っても過言ではないでしょう。

スポーツクライミングも、国内外の数多くの競技大会に選手を派遣し、育成、強化に努める必要があります。また、若手の発掘と育成も急務と言えます。十分に練られた戦略と資金が必要です。JMSCAはこの5年で大きな変革の時期を迎えています。

JMSCA役員一同、今後共、加盟団体の皆様、登山者、スポーツクライミング関係の皆様のご協力をいただきながら、これからの5年、不断の努力、進取の気性をもって取り組んでまいります。

皆様方の一層のご理解とご支援をお願い申し上げます。

(文責 副会長 亀山健太郎)



## 第147回 Mountain World

### K2冬季初登頂 宴のあとさき

池田常道

前号に書いたように、K2の冬季初登頂は1月16日、10人のネパール人によって果たされた。彼らは、1月中旬に訪れた好天の窓を有効に使って、冬季未踏でただひとつ残っていた8000m峰の頂に足跡を刻むことができた。

しかし、次のチャンスが訪れたのは、それから3週間も経った2月5日になってからだった。この間、BCで待機を余儀なくされていた外国人クライアントたちが一斉に行動を起こしたが、この好天の窓は短く、5日午後には風が強まって、登山者たちを阻んだ。

これらの登山者は、チャン・ダワ・シェルパの率いるセブンサミット・トレックス公募隊のクライアントだった。ロジスティクスは任せるが、頂上までガイドしてもらおう契約にはなっていない、いわゆるインディペンデントである。

例外はアイスランドのジョン・スノーリ・シングルジョンソン(47)で、彼は前年冬のK2で隊長を務めたミンマ・ギャルジェ(ミンマ・G)とうまく行かず、今回はパキスタンのムハンマド・アリ・サドパラ(46)とその息子サジード(22)を高所ポーターとして雇っていた。アリ・サドパラはナンガ・パルバットの冬季初登頂を成し遂げた、パキスタン随一の高所クライマーでもある。無酸素で登るチリのフアン・パブロ・モール(33)もこの3人に加わっていた。

この4人を含めて、頂上攻撃に加わったのは40人以上だったが、途中から引き返した者も多く、2月4日夜までに最終キャンプ(C3、7300m)に達したときは20人前後まで減っていた。BCで長期の滞在を強いられたために、せっかく獲得した高所順応も効果が薄れていた。C3には3張のテントしかなかったが、ノエル・ハンナ(北アイルランド)によれば、一部の報告と異なり、全員がなんとか中に納まり、外で夜を過ごした者はいなかったというが、招からざる者は入口でシェルパに追い返され、顔見知りを利用して1時間も寝場所を捜したという報告もある。

スノーリのチームは、ネパール勢が1月16日に攻撃することを知らされず、間に合わなかったが、これはどうやらネパール勢が予定を洩らさなかったためらし

い。サジードはC3で、翌日転落死したセルヒ・ミンゴテ(49)から「キミは一緒にアタックしないのかい?」と尋ねられたと証言している。(スノーリが天候予測を誤った?)か、彼らはC2に留まりネパール勢の攻撃に間に合わなかった。

登頂したネパール勢はBCに帰ってからも、ルートの詳細を他の登山者に伝えなかったようだ。C3の先に横たわる大きなクレバスの存在も、それをどこから越えたかも、洩らす者はいなかった。登頂した者は、それぞれのスポンサーに向けてインスタグラムで発信するのに忙しく、現地にいる登山者が状況を知ったのは、インターネットを通じてだったという。

スノーリ、モール、サドパラ父子は、2月5日の午前10時ごろボトルネックに着いた。ここから酸素を吸おうとしたが、サジードのレギュレーターが故障して酸素が漏れ出した。父の勧めで戻ることにしたが、C3に帰り着いたのは4時か5時になっていたという。

夜11時ごろ天候が悪化して風が強まってきた。テントを出て頂上を見上げたサジードの目に、3人が行動していることを示すヘッドランプの光は映らなかった。スノーリが携行していた無線機は(ミンマGによれば)、工事現場で使うような感度の低い代物だったという。この日の朝サジードが別れてから一切連絡が入らなかった。3人はそのまま、C3で待つサジードの元には帰らず、行方不明になった。この日はブルガリアのアタナス・スカトフ(42)が頂上を諦めてC3から下る途中で転落死し、1月16日のセルヒ・ミンゴテを含めて犠牲者は5人になった。BCにはチャン・ダワとその一行が残り、サヌ・シェルパを除く登頂者はすでにカトマンズへの帰路についていた。



還らぬ英雄を悼んで、スカルドの街路にキャンドルが灯された(ジョン・スノーリのフェイスブックから)



## 増本亮&さやかの Never Ending Journey ④

ニードルズを後にした私たちは、ユタ州やネバダ州へと足を伸ばし、日本ではほとんど知られていないようなローカルな岩場にいくつか寄り道することにした。これこそ長期のクライミングツアーの醍醐味だ。旅の期間が短かったら行き先は、はじめから決めているのが普通だし、色々寄り道する余裕もない。次なる目的地ザイオンで夫が目標とするのは、パワフルな持久系の内容が予想されるルート。ここまで比較的傾斜のない花崗岩を登ってきた私たちは、次の目標に備え石灰岩の傾斜の強い岩場でトレーニングをしたいと思い、現地で情報収集し行き先を決めた。

石灰岩といえばヨーロッパのイメージが強く、アメリカの石灰岩の岩場には期待していなかったのだけれど、見事に裏切られた。日本ではほとんど無名ともいえる岩場一つひとつのスケールの大きさと言ったら、関東で言えば二子山クラスの岩場はそこら中にあるし、マウント・チャールストンやウェルカムスプリングスなどその何倍もの大きさの岩場も珍しくないということがわかった。北米大陸は広大で、そして個性的で魅力的な岩場は数限りなくあることを改めて痛感。

私たちは初めて名前を聞くものも含めいくつかの岩場を巡った。たくさんのオンサイトトライが出来るということは、なんて楽しく幸せなことだろう。ハングするルートをおののき、パンプする前腕にヒーヒー言いながらも、次から次へと新しいルートに取り付き、新鮮な気持ちでクライミングを楽しむことができた。そこで登るのはほとんどが地元のローカルクライマー。彼らから得る情報はこの周辺のエリアを知る上で何にも勝るもので、それを元に次の岩場の行き先を決めたりもした。

ちょっとは身体が持久系のルートに慣れてきたかな、というタイミングで夫が体調を崩してしまった。クライミングの疲労だけでなく、移動やずっと続けている車上生活の疲労が知らず知らずのうちに蓄積していたのだろう。早くザイオンへ行きたい、というはやる気持ちを抑え、宿に泊まったりと休養し回復に努めた。

私にとって、ザイオンはずっと行きたいと思っていた場所。赤色の砂岩がとても印象的だ。迫力のある溪谷が一面に広がり美しい。非常に人気のある国立公園で、観



全く歯が立たなかったテフロンコーナー

光客やハイカーと日々たくさんの人が訪れ賑やかだ。公園内は車の乗り入れができず、各クライミングエリアにも公園内を巡回している無料のシャトルバスに乗らなくてはならない。

着いて早々足慣らしを済ませ、いざ本番。夫が目標としていたのは「ムーンライトバットレス」という、アメリカを代表するクラシックなマルチピッチルート。自然の造形美を感じてしまうことであるけれど、このルートもどうやって作られたのだらうと思わずにはいられないほど、一本のクラックが空に向かって走るように伸びている。しかもそのクラックはハンドサイズ以上には広がっていない。10ピッチ中、キャメロット1番が最大サイズという特殊なラッキングだ。美しいクラックだけでなく、際どいトラバースやら地ジャンやら変化に富んでおり、このルートが北米屈指のマルチピッチというのも肯けた。

オンサイトは惜しくも核心ピッチあと一手のところまで逃してしまう。気持ちを切り替えるためにも途中で下降することに決め、レストを挟んで再度トライ。前回のトライの時に見られた焦りはなく、着実にピッチを進める夫。一日中手も足もジャミングテクニックを駆使して、一度もロープにぶら下がることなく夫はこのルートを登り切った。オンサイトできなかったことは悔しいけれど、できなかったことで見えてくる反省や課題が次の糧となり、モチベーションにも繋がっていくし、案外後になって思い出すのは決まって悔しい思いをしたルートだ。

あっという間に季節は巡り、10月も中旬が過ぎようとしていた。北米ツアーも終盤。私たちは北米ツアー最後の目的地、ヨセミテへ向けて車を走らせた。ヨセミテにはここ数年毎年来ていることもあり、新鮮味も何もない。でも、私たちはここに来るのを待ち焦がれていた。この数ヶ月で色々な岩場を巡ったけれど、やっぱりヨセミテが一番だと二人とも感じていた。それはこの地の厳しさにある。心も体も万全にして望んでも跳ね返されてし

まう厳しさ。ルート自体の難しさだけではない。ランナウトするルートも多く、1本1本のルートも長い。時間や天候との駆け引きもある。だから、登る力以上に求められるのは精神的な強さ。私はこれまで幾度となくこの場所で打ちのめされてきた。この地でクライミングが楽しいと思える瞬間は正直少ない。でも自分がクライマーとして一回りも二回りも成長させてもらってきたと感じる。

今年は特別大きなチャレンジをしようとしていた。エルキャピタンのフリーライダーを登る。旅に出る前から決めていた目標だ。フリーライダーはサラテのフリーバリエーションで全35ピッチ、グレードは12d(もしくは13a)で、エルキャップ(メインウォール)のフリールートの中では最も簡単なルートと言える。最近の記録としてはアメリカ人クライマーのアレックス・オノルドがフリーソロしたことで有名だ。数年前夫のトライをフォローしたが、今回は全ピッチのリードトライが目標だ。

自分自身にとって大きすぎる目標だということはよくわかっていた。各ピッチを登り切れるという十分な自信を持っていない上に、水や食料、ギア類を含めた総重量50キロを超えるホールバックの荷上げがネックだった。悩んだ挙句、5.10以下の簡単なピッチは夫に

リードしてもらい私はフォローする。そして5.11以上は私がリードするという形で登ることに決めた。下部のフリーブラストを登り、一旦下降。荷上げを済ませ、いざゴーアップ。荷物の重さと自分の実力のバランスをとり、日程は4日間とした。

はじめから最後まで気の抜けるピッチは1ピッチもなかった。40mほどワイドクラックが続くモンスターオフィドゥスを抜けるのに想定以上の時間がかかり、初日から体力の限界まで出し切ってしまった。それでも3日目の懸念ピッチだったエンデューロコーナーは日暮れ前ギリギリに何とか登り切ることが出来たし、最終日も気持ちを切らさず登り続け山頂へと抜けることができた。気づけば、一番の核心ピッチであるテフロンコーナー以外フリーで登ることができていた。もっと色々なピッチで躓くと思っていたので、全体を振り返れば想像以上の出来。そして今持てる力を全て出し切るクライミングが出来たことは何よりの成果だった。

登れなかったテフロンコーナーはツルツルの凹角をステミングで登る特殊な課題。悔しさを感じるには程遠いくらいの実力不足だった。帰国したらどんなトレーニングを積んでいこうか、と考え始めている自分。だからクライミングはキリがない。次に繋がる宿題をくれたエルキャップに感謝し、私たちはヨセミテをあとにした。

## 令和2年度登山普及情報交換会報告

今年度の登山普及情報交換会は新型コロナウイルスに伴う緊急事態宣言のため2月13日(土)にZoomによるオンライン会議の形で実施した。16時より開始。今回は28岳連の理事長または普及委員長、JMSCA理事より11名の出席があり41名での会議となった。

最初に八木原会長から「群馬県では植物園などがコロナ禍もあって存続の危機を迎えている。この状況を打開するために子ども連れがキャンプをできるようなスペースを開放するという。アウトドアのブームは日本中で起こっている。JMSCAも登山というカテゴリーにこだわらず新しいアイデアをどんどんと出していくことで、JMSCAという名を日本中に浸透させていかなければならない時期にきている。」と挨拶。

今年度の情報交換会のテーマは「全日本登山大会の改革について」である。これはJMSCAの普及委員会でもこの間ずっと話し合われてきたテーマである。今年度は千葉県(コロナ禍のため3年後に延期)来年度より新潟県、高知県と開催が予定されている全日大会だが、かつての全日OBの参加がほとんどで同窓会のように

なっているのが現状である。

この全日大会を使って若い世代や未組織登山者にJMSCAの存在をアピールしていくとよいのではというのが委員会でのほぼまとまった意見である。JMSCAの登山イベントに一般の人を多く呼び込もう。アイデアとしてはあるのだがなかなか実行に至らないのが現状である。このテーマについて出席した各岳連の方々から一人2分ほどで意見を出してもらった。以下、出席した方々の意見等を紹介する。(敬称略)

川端(青森) 谷川岳で行われた全日大会に参加したことがある。安全対策をテーマに実技などがあってためになった。しかし、若い人の参加がなかった。「夏山リーダー講習会」を高校生や顧問の先生にも受けさせたい。

大槻(宮城) 個人では行けない冬山やテント泊の登山ができれば参加が増えるのでは。

渡辺(福島) 山岳フェスのようなイベントをしたらという声もあるようだが、それでは参加者の交流ができない。やはり登山の技術交流ができるものではないと、大会として成り立たないのでは。

仙石(栃木) 全日大会はかつて技術交流の場であっ



た。今は岳連の高齢化でそのようなことはできないだろう。数年前、京都で開催された大会のように一般の人々が多く参加できる大会にしてはどうか。

金子(群馬) 群馬県では子どもを対象にしたジュニア委員会主催のイベントを年3回行っている。今後は保育園の子どもたちを受け入れたアウトドアイベントを計画している。

蛭田(千葉) 従来の全日大会の形式にとらわれずJMSCAブランドを打っていく。京都大会の成功例を参考に一般の人が参加しやすいイベントを作るべき。できることから地道にひとつずつやっていく。

松本(東京) 若い人たちは山岳会などに縛られるのを嫌がり、ゆるやかなつながりを求めている。技術を教わりたい気持ちは強く、お金を払ってでも学びたいと思っている。そうしたニーズに応えていかないと。

廣川(東京) コース、内容やプログラムを工夫する必要がある。例えば全盲の人たちの登山をサポートするとか、環境問題について考える子ども向けのプログラム作るなど。なかなか一般の人を取り込むのは難しい。

西内(茨城) 全日大会のような全国レベルのイベントをなくしてはならない。会員向けのものとは一般登山者向けのものとは企画を分けるとよい。

伊藤(神奈川) 全日大会については特に意見はない。

望月(山梨) 何のためにやるのか、主旨をはっきりさせるべき。参加費が高すぎる。これでは若い人たちは参加しない。

開澤(富山) 全日大会(を議論する)よりも、他の(大事だと思う)指導や遭難対策等の事業とかブロックでやるような事業を考えた方が(力を入れた方が)どうか。

北村(愛知) この大会にどういう魅力があるかを考えることが必要。参加者に事前に登る山について研究してもらおう。山の文化を学び、そして山に臨むようなプログラムを作る。

加藤(三重) ブロック開催で近隣の岳連が助け合って実施するとよい。

水谷(岐阜) 岐阜県では岳連関係者ではない一般登山者なども参加しやすいよう乗鞍岳のコースを設定した。かなり準備に時間がかかり大変だった。高校の先生、生徒も参加した。全日大会は目的をはっきりさせるべき。

高間(滋賀) 全日大会については特に意見はない。

石田(大阪) そもそも全日大会の主旨は?それをはっきりさせないと。必要なのは組織力の強化。山岳会は減ってきている。個人会員を増やす努力すべき。

伊藤(兵庫) 全日大会は目的・主旨をはっきりさせて

継続すべき。若い人たちが参加するには費用が高すぎる。

前田(奈良) 参加費を抑える必要あり。普及委員会だけでなく、指導や自然保護、遭対と一緒に大会を考えていくべき。

白子(和歌山) 大会を内向きなものにするのか、外向きなものにするのかをはっきりさせたほうがよい。

村井(広島) 広島では登山フェスと比婆山トレランを実施した。

明上(香川) 「四国登山大会」を実施している。結構参加者は多い。交流目的なら2~4年に1回でもいいのでは。登山大会の目的を明確化すべき。

椎野(徳島) 参加費が高すぎる。このままだと現在参加している高齢の方々が来なくなったら消滅してしまうのでは。

山上(福岡) イベントとしての主旨や目的をはっきりさせて全日大会は続けていってほしい。九州では「九州岳人の集い」というものを開催している。

武末(佐賀) 岳連加盟団体も高体連加盟校も少ない。山岳部の顧問を育てていかないといけない。

前川(長崎) 2年前に全日大会開催の打診があったが、岳連の体力的な問題で断った。今の全日大会はOB会的な要素が強く主旨がはっきりしない。

永谷(鹿児島) 主旨・目的をはっきりさせないと。また大会自体も時代とともに変化していかないといけない。

他に唐木理事からは、全日大会は登山の大会としての主旨をはっきりさせて今後も続けていくべきである、と意見が出た。

この後、蛭田指導委員長から「夏山リーダー講習会」の状況、今後の目標など説明があった。

最後は丸副会長の挨拶で今年度の登山普及情報交換会は18時に終了した。

慣れないオンラインでの会議で活発な意見交換とまではいかなかったかもしれない。しかし、貴重なご意見を多数いただいた。今後、普及委員会での話し合いに反映させていきたい。(文 谷口浩平)

創立60周年記念出版

### 『UIAA総合登山技術ハンドブッカー-夏季アルパイン』

日本語版 好評発売中!

B5サイズ、376頁、全頁カラー、頒価2,200円(税込・送料込み)購入ご希望の方は、下記郵便振替で代金をお振込みください。

郵便振替口座番号: 00110-5-546693

加入者名: (公社) 日本山岳・スポーツライミング協会



## 山の自然環境を考える(その1)

(一社)大阪府山岳連盟 会長 飛田典男

先日、屋久島の白谷雲水峽を散策した際に沢の中を辿るコースの岩が無残にも数か所コンクリートを破碎するドリルの様なもので削り取られていた。恐らく安全対策として措置されたものだろうが非常に残念に思った。環境省が管理し、レンジャーも常駐して見回っている公園内ではあってはならないものではないだろうか。恐らく、当初は木道で整備されていたのだろうが沢の中ということで木道の流出が繰り返され、最終的な結果として階段状に岩を削ってコースを整備してしまったものと推察するが、本当にこれで良いのだろうか。自然を可能な限り壊さないことを大前提としているにも拘わらず、である。勿論、試行錯誤した上でのこととはいえ速やかに現状復帰を願うものである。

屋久島の事で思い至ったのがオーストリアのAyers Rockである。Ayers Rockは原住民が聖なる存在として崇めている対象であることを尊重し2019年10月26日から登山禁止となっている。小生が訪れた2010年当時は天候など幾つかの条件さえ整えば登山が許可されていた。登山ゲートには40数名の死傷者のあったことを含め複数の言語で登山に関する注意と自粛を求めるメッセージが掲示されていた。登山ゲートから頂上まで高低差が348mあり、下部100mほどの緩傾斜スラブは岩肌のままで人工物は何も無く、傾斜の増す付近から鎖と支柱が上部の台地まで設けられていた。(写真-1)その先は、頂上の方位盤(写真-2)まで点々と白ペンキ(写真-3)が付けられていた。その時は、深く考えもせずに登ってしまったが、これらの人工物は総て撤去されているのだろうか。

聖なる山として有名なのは河口慧海の「チベット旅行記」で紹介されているチベット仏教、ヒンドゥー教等の聖地(須弥山)カイラス山であろうが、ここも心無い登山者が登頂したことで社会的に大きな批判を過去に浴びている。また、日本隊が初登頂したマナスルも聖なる山として現地人が崇拜していたことで、登山隊が相当な抵抗を受けたことが報告されている。明らかに聖地とされている山に対しては畏敬の念を持って臨み、山麓からの眺望に止めておくべきである。

次いで思い当たったのが日本の山のいたる所に見受けられる遭難者慰霊碑やレリーフのことである。実は、小生の所属する山岳会でも穂高等で遭難者の鎮魂を願って複数のレリーフを設置してきた経緯がある。昨年、会の80周年を迎えるに当たり、これらを全て撤去

し合祀する事が提案された。レリーフの撤去は更なる自然破壊になりかねないとの誹りを受け兼ねない。そこで、どうすれば問題なく事を運ぶことが可能かを各関係先に問合せを行った。その結果、穂高周辺では環境省中部山岳国立公園管理事務所から各地域の管理官事務所及び林野庁中部森林管理局から地域振興局林務と管理署、そして所轄官庁の教育文化財課に計画書を提出し、承認を戴くことが必要であり、その上でレリーフの撤去を行い現状復帰の報告を行う事で、実施する事が可能となることが判明した。そこで、この複雑な諸手続きと交渉を行い、レリーフを収容することができた。

以上、三つの事例を挙げてみたが、皆さんはどのような感慨をお持ちになったであろうか。我々は、山の自然と如何に取り組んでいくべきかを倫理に照らして明確にしていく努力が求められている。

屋久島の事例は速やかに現状復帰すべきであり、Ayers Rockに関しても人工物は総て撤去し、登山は禁止されて然るべきであると考えます。慰霊碑やレリーフの件は、賛否両論あろうが、一つの取組として理解いただけるのではないだろうか。次回は、地球温暖化と山の自然環境について考えてみます。





## 令和2年度全国理事長会議報告

令和3年2月14日(日)にコロナ禍によりオンライン会議(Zoomミーティング)で全国理事長会議が開催された。

会議には、42都道府県岳連、高体連登山専門部の加盟団体と理事23名、監事2名、委員長13名が出席。

### 1. 開 会

冒頭、八木原会長から「昨年は本協会創立60周年の年でしたが記念事業は適いませんでした。今年は役員改選の年です。意欲ある皆さんに理事に就任してほしいと思います。登山が目まぐるしく変わっている時代です。時代に合った施策を実行できる人たちと一緒に本協会を運営して参りたいと思っております。存亡の危機にあると認識しています。登山だとか、スポーツクライミングだとか言っている状態ではありません。C A S 仲裁の件では、昨年12月に裁定がありました。選手や関係者の皆さんを長い間、不安定な状況に追い込んでしまいました。本当に申し訳なく大きな責任を感じております。延期された東京オリンピックは3月には方向が示されそうですが、ここまで頑張ってきた選手の晴れの舞台が奪われないことを祈っています。」と挨拶。

次いで、会長が議長になり、小野寺事務局長がZoomミーティングのホストを務め、議事に入った。

### 2. 報 告

#### (1) 令和2年度事業経過報告について

小野寺常務理事が資料に基づいて報告した。

#### (2) 令和2年度決算見通しについて

今年度は、コロナ禍で各種事業が相次いで延期・中止を余儀なくされた。そのため今期末の当期経常増減額は、大幅なプラスになることが予想される。

#### (3) 令和3年度事業計画(案)について

事業計画(案)が説明され、文言・日程の一部変更があった。

#### (4) 令和3年度収支予算(案)について

予算委員会から328,414千円の予算枠が提示されたが、各部から出された予算総額は、347,458千円となった。予算委員会で審議し、3月の理事会にお諮りする。最終的には、2,000万円ほどの赤字予算になる見込。

#### (5) C A S 裁定と東京2020オリンピック代表選手について

これまでの経緯と今後の対応について報告された。

#### (6) ガバナンスコード(G C)について

中央競技団体のG C対応について説明があり、本協会のG Cの自己説明と公開については、1月末にHPに掲出していると報告された。

#### (7) J M S C A 中期経営計画(2021-2025)について

G C原則1にある、中長期経営計画については、取り敢えず2021年~2025年の中期計画を策定している。パブリックオピニオン(P O)については、加盟団体、関連団体、委員会、役員、委員長、選手・コーチ等あらゆるステーク・ホルダーにアンケートを依頼した。

#### (8) 次期役員改選について

次期役員改選のスケジュールや役員候補者の推薦について説明があった。G C原則2では、外部理事、女性理事の割合が規定されており、激変緩和措置の令和5年までにはその要件を満たす必要がある。第1ステップとなる今年6月の役員改選では、その辺も見据えて選考して頂きたい。

#### (9) 創立60周年記念事業について

出版事業については、U I A A 夏季ハンドブックは出版済で、好評発売中である。記念誌は、校了している。

特別功勞表彰については99名の被表彰者が決定し、表彰状も準備した。3月中に記念誌、表彰状は加盟団体にお送りする。

#### (10) 国内旅行傷害保険包括契約について

2019年10月1日から保険法が変り、運動割増保険の付保が出来なくなった。各加盟団体が各種事業の参加者保険に困っている現状を鑑み、令和3年6月1日を始期とする国内旅行傷害保険包括契約を各加盟団体の各種事業についても適用されるようにした。希望される加盟団体は、活用してほしい。

#### (11) 日山協山岳共済会令和2年度事業・会計経過報告及び令和3年度事業計画・予算(案)について

令和2年度は、コロナ禍により加入者が前年比で6,500名ほど減少した。そのため補正予算を組んでJ M S C A への業務委託料も500万円削減した。

令和3年度予算は、収入52,410千円、支出57,000千円で、▲4,590千円の赤字予算となる。

共済会への加入減少が止まらない。J M S C A 山岳保険の説明書をお送りしたので、一般登山者に向けた積極的な広報活動をお願いしたい。

#### (12) その他の報告等について

##### ア. 令和3年度第59回全日本登山大会予報(新潟)

令和3年度の第59回大会について要項説明があった。コロナ禍でもあり、開催については最終的に3月に決めたい。

##### イ. 令和4年度第60回全日本登山大会予報(高知)

令和4年度の第60回大会の要項説明があった。

- ウ. 選手強化に関する都道府県担当コーチについて  
安井強化委員長から担当コーチの報告があった。

### 3. 加盟団体からの質問事項について

- ア) 次世代を担う人材導入と育成計画について

役員については、令和5年までにGCに適合するように進めていく。専門員会によっては、外部の学識経験者を常任委員に迎えて活発に活動している。選手登録は、他の競技団体のような選手登録制度を検討したい。個人会員制度は、長年の課題で、色々と検討してきたが、メリットのところで躓き、進んでいない。前向きに捉えていきたい。

- イ) 日山協山岳共済について

加盟団体の共済会サポート委員の協力をお願いしたい。既存会員のための講習会やJMSCA講習会の会員割引も検討している。

- ウ) SC部の財源及び今後の活動資金等について

経常収益の40%は協賛金、32%は補助金、と外部資金72%で賄っている。協賛金は博報堂DY・MPと2021年1月～2025年3月までの複数年契約ではほぼ従前通りの財源確保が出来た。補助金についてはJOC選手強化費が大きい。令和3年度の選手強化費は昨年並みの確保ができて、との事。一方でJSCの助成金は減額が予測される。

- エ) JMSCAの登山部の活動に関して

過去の遭難事故発生箇所の実地分析を行ってきた。道標の整備については、関西・関東などモデル地区を

設けて行っている。遭対委員会だけでは無理なので、労山、JAC等と一緒に地元の行政を動かしている。

ルート整備に関しては省庁の連携、地権者等の責任、地域住民との調整、環境問題、登山者の山に対する考え方の違い、などある。

2014年に長野県が、山をグレーディング化し、公表した。これを皮切りに10の県で行っている。これが47の全国の取り組みに代わると一定の基準ができて、山を評価できる。登山者が自分の実力に合わせてることが出来る。一般ルートとバリエーションルートの区分けが可能となり、安全登山につながる。

- カ) ユニバーサルデザインの推進について

東京オリンピック・パラリンピックでも、ユニバーサルデザイン化を世界規模で推進していこうという動きがある。JMSCAの公益に資する活動として、現在、全国の人工壁でルート・課題を設定するときホールドの色やテープの色により区別するのであれば、ユニバーサルデザインの観点から色覚特性に配慮した色配置にするよう、加盟団体運営者・ルートセッター・ジムオーナーなど関係者に広報されてはどうか。色だけではなく、形、文字等を使って色覚特性に対応する方法がある。JMSCAとしてジム、ルートセッターにもきちんと伝えてほしい。これが認知度向上、マスコミへの広報にもつながる。早急に対応願いたい。

## 4. 閉会

最後に丸副会長が挨拶を述べ、閉会となった。



### 令和2年度 第9回 Web理事会報告

日時：令和3年2月10日(水)  
14:05～16:00

場所 Web会議

出席者 八木原会長、亀山、平山、丸各副会長、尾形専務理事、小野寺、水島、合田各常務理事、相良、蛭田、町田、村上、山口、水村、前田、六角、唐木、古賀、山本、古林、小日向、安藤各理事、中島、古屋各監事

欠席者 村岡理事

#### 1. 開会

冒頭、八木原会長から「先般2月3日に開催されたJOC臨時評議員会に出席した。組織委員会の森喜朗会長の演説も聞いた。その夜は発言について特にニュースはなかったが、翌朝はメディアが大騒ぎ、午後は謝罪会見になった。出席していた評議員も批判されていたので、謹慎している。」

と挨拶。

続いて事務局から理事22名、監事2名の出席が確認され、事務局がオンライン会議のホストを務めて議事に入った。

#### 2. 議題

- (1) 議案第1号 議事録の承認について

令和2年度第8回(1月)理事会議事録の承認について(事前送付済)事前にメール送付しており、全員異議なく承認された。

- (2) 議案第2号 役員候補者選考委員について

尾形専務理事から資料に基づき以下の9名の委員候補者の提案があった。採決の結果、議案第2号は、議長を除く出席理事21名全員の賛成により、原案どおり可決承認された。

#### 〈役員候補者選考委員〉

溝手康史(国立登山研修所専門調査委員・弁護士)、神崎忠男(前会長・顧問)、古屋壽隆(山梨県山岳連盟顧問・監事)、山口純子(ガバナンス委員会主管理事・学識経験者正会員)、合田雄治郎(SC部長・学識経験者正会員)、亀山健太郎(副会長・東京都山岳連盟正会員)、小野寺齊(総務部長・事務局長・学識経験者正会員)、

古賀英年(登山普及委員会主管理事・兵庫県山岳連盟正会員)、山本讓(技術委員会主管理事・学識経験者正会員)

- (3) 議案第3号 令和3年度事業計画(案)について

小野寺常務理事から資料に基づいて提案があった。総論の文言一部加筆・訂正及び事業計画の訂正があり、3月理事会で正式決定となる。

- (4) 議案第4号 参与の推薦と賛助会員入会承認について

小野寺常務理事から資料に基づき(一社)広島県山岳・スポーツライミング連盟名誉会長・京才昭氏と同会長・山田雅昭氏の参与推薦が提案された。

採決の結果、2名の参与推薦は、議長を除く出席理事21名全員の賛成により、承認された。

続いて賛助会員に関する規程第2条第1項第2号の定款第28条に規定する参与の賛助会員の入会承認が諮られた。

採決の結果、2名の賛助会員の入会が、議長を除く出席理事21名全員の賛成により、承認された。

- (5) 議案第5号 指導員の認定について

蛭田理事から資料に基づいて以下の認定



承認が諮られた。

### 〈山岳コーチ1〉

東京都山岳連盟：土井根忠志、望月肇  
茨城県山岳連盟：堀香奈、津田裕一、  
藤田恒夫

福島県山岳連盟：長谷川裕

採決の結果、上記6名の認定承認が、議長を除く出席理事21名の賛成により、原案通り承認された。

(6)議案第6号 定款の一部改定について  
合田常務理事から資料に基づいて以下の提案があった。

定款では第9条で除名を規定しているが、倫理規程第4条第2項では、永久追放、除名、戒告を規定しており、定款と倫理規程の整合性が取れていないのではなか、との指摘が加盟団体からあった。ガバナンス委員会で検討した結果、定款第9条第1項に「なお、事案の重大性によっては、以後入会を認めないことができる。」を加筆する改定案が諮られた。

採決の結果、議長を除く出席理事21名のうち、賛成20、反対1(丸副会長、理由：変更の必要なし。)の賛成多数で可決承認され、6月の定時総会に諮られることになった。

(7)議案第7号 全国理事長会議質問事項(3都府県)の回答について

3都府県の質問について回答する担当者が承認された。

### 3. 報告

①報告第1号 1月度月次会計報告

相良理事から資料に基づいて報告があった。

中島監事から今年度の協賛金の減額の有無について質問があった。

尾形専務理事から協賛金の減額は一社55万円のみとの返答があった。

コロナ禍による競技大会の中止等に伴う経費減少から生じた令和2年度の黒字分の扱いについては、予算委員会で改めて審議したい。

②報告第2号 中期計画PT途中経緯について

亀山副会長から口頭で報告があった。

③報告第3号 令和3年度予算経過報告について

尾形専務理事から資料に基づいて報告があった。

予算委員会で審議してもらう内容であ

り、事前に理事会に現状経過を報告する。いまのところ収支プラマイゼロの予算案になっている。令和2年度決算は黒字が予想され、将来の特定事業に充てるため特定費用準備資金を積み立てて貸借対照表に計上したい。今後5年間の特別事業に使っていききたい。令和3年度の予算は、2,000万円程度の赤字予算として、3/11の理事会に諮りたい。

④報告第4号 国体競技施設規定のIFルール準拠への訂正について

水村理事から報告があった。合田常務理事が補足した。常務理事会では「4 競技場の基準」の文言に主語が抜けているので、主語を加筆することで、全員一致にて承認されており、この点については西原国体委員長に確認する。

⑤報告第5号 スピード種目に関する規程改定について

合田常務理事から、本協会の主催大会だけでなく、共催大会の記録も有効とするために、後援を外して「共催」を追加したとの報告があった。常務理事会で承認。

⑥報告第6号 I F S C 会長からの要請について

平山副会長から資料に基づいて報告があった。どのような形で I F S C と J M S C A がポジティブな方向で国際貢献するかについて、S C 部で提案すること。

⑦報告第7号 2021年ボルダリング日本代表選考について

古林理事から資料に基づいて8名の日本代表追加選手が報告された。常務理事会で承認。

⑧報告第8号 ユース選考基準について

古林理事から資料に基づいて選考基準の報告があった。常務理事会で一部修正で承認。

⑨報告第9号 2020年スポーツクライミング日本代表選手への協会補助金について

古林理事から資料に基づいて総額200万円の配分報告があった。常務理事会で承認。

⑩報告第10号 高校指導者ブロック別研修会について

前田理事から資料に基づいて開催要項の報告があった。

⑪報告第11号 スポーツクライミングブ

ロック/都道府県代表コーチ一覧について

古林理事から資料に基づいて報告があった。(石川県コーチは、富山県コーチが兼務との修正あり)

⑫報告第12号 第16回B J C (駒沢) 報告について

村上理事から報告があり、平山副会長から補足があった。蛭田理事から、数県が開催反対をしており、意見書を提出していた。その報告を聞きたいとのことで、尾形専務理事より回答があった。該当県に意見書に対する回答書を送った。来場者全てにP C R検査も義務付けた。回答書は登山月報にも掲出した。大会終了後3日目に業者の一人が陽性になったとの報告を受けた。この業者は選手・スタッフに接触履歴はなく、濃厚接触者は運転手1名のみ。来場者の体調管理(Metellアプリを利用)については継続観察中であるが、今のところ発症の報告はない。P C R検査のキットは220本確保した。1本が8800円であった。3月6日開催予定のS J Cも、緊急事態宣言継続中であれば、P C R検査は義務付けるつもりである。

4月の山岳スキー日本選手権でも後日相談したいとの事。

丸副会長から大会施設について質問があった。これについては村岡大会実行委員長に確認することになった。

⑬報告第13号 第3回S J C (亀岡) について

尾形専務理事から資料に基づいて開催要項の報告があった。

⑭報告第14号 第34回L J C (印西) について

尾形専務理事から資料に基づいて日程変更した開催要項の報告があった。

⑮報告第15号 スポーツクライミング・イベントスケジュールについて

尾形専務理事が概略説明を行った。C J Cの日程については5/15,16になっていたが、6/5,6への変更を岩手県と調整中。これは6/5,6予定のI F S CのW Cが別日程になり、空いたため。国内では5月末にL Y Cを予定しており、C J Cの後2週間でL Y Cを行うのは日程的にきついと判断した。

⑯報告第16号 役員派遣について

(2月11日(木)~3月11日(木))

1)登山普及情報交換会 2月13日(土) 16時~18時 於：オンライン  
八木原会長他

2)全国理事長会議 2月14日(日) 9時~12時 於：オンライン 八木原会長他

3)第11回富士山利用者負担専門委員会 2月16日(火)14時~ 於：オンライン  
尾形専務理事

4)J O C 第2回総務本部会 2月25日(木) 14時~ 於：オンライン 尾形専務理事

5)第3回S J C 亀岡大会 3月6日(土) 於：グラビティリサーチ サンガスタジアム by KYOCERA 八木原会長他

6)J O C 選手強化本部会 3月9日(火) 於：オンライン 合田常務理事

## 寄贈図書

会報	(公財)健康・体づくり事業財団	「健康づくり」No.514 202102
	(公社)日本近代五種協会	「近代3種」No.4 202101
	日本ヒマラヤン・アドベンチャー・トラスト	「HAT-J NEWS」No.120
	兵庫県山岳連盟	「兵庫山岳」第644号
	(公社)日本武術太極拳連盟	「武術太極拳」2021年2月 No.374
	やまびこ山想会	「やまびこ」第191号
	日本勤労者山岳連盟	「登山時報」3月号 No.553
	(公社)日本ネパール協会	「会報」2021年新年号 No.255
	(一財)日本防火・防災協会	「地域防災」2021年2月号 No.36
	東京野歩路会	「山嶺」Vol.98 No.1092
広報誌	(公財)日本スポーツ協会	「J S P O スポーツニュース」「J S P O フェアプレイニュース」Vol.126
	国立スポーツ科学センター	「Journal of High Performance Sport」2020 Vol. 6
研究誌	(株)ネイチュアエンタープライズ	「岳人」3月号 No.885
	(株)山と溪谷社	「山と溪谷」3月号 No.1032
雑誌	A-SPORTS 事業部	「ACTIS」Vol.12
	(株)日本運動具新報社	「スポーツ産業新報」第2315号、第2316号、第2317号
冊子		
新聞		

**JMSCA 60周年募金協力者ご芳名**  
 (2021年3月10日現在、敬称略)  
 10口：山梨県山岳連盟、6口：喜内敏夫  
 (総額：1,230口 6,150,000円)

想像をはるかに超える“保温力”  
**超肌着力**

表紙のこぼれ

今月号からは、グレート・カラコルムのメイン、バルトロ街道の山々で表紙写真を飾ります。

まずはじめは、世界第2位の高峰K2(8,611m)です。先月号で既報のとおり、本年1月16日に冬季初登頂が成されました。冬季未踏で残っていた唯一の8,000m峰もついに陥落しました。

映画「白き氷河の果てに」で知られる1977年日本K2登山隊の許可取得は本協会でした。

中国名は、チョゴリです。1982年中国側から北稜初登攀を成したのも本協会の登山隊でした。

写真は、コンコルディアからの雄姿です。  
 (写真撮影者 尾形好雄)

**トレランJAPAN**  
 一般財団法人 日本トレイルランニング協会  
 〒141-0031  
 品川区西五反田6-3-23-205  
 ☎03-3492-0355 FAX 03-6451-3767

編集後記

東日本大震災3.11から節目の10年を迎えマスメディアはにぎやかだ。復興は始まったばかりの様相であり進んでいない。特に東電の福島原発事故は先が見えなく将来子供たちに重い負担を残すようだ。汚染処理水の処分についての一案、知見や科学的根拠はないが地元の海に流すのであれば、浮ドッグや、タンカーで太平洋西ノ島まで運び火口に放流、あるいはタンクごと投下など、自分のこととして考えればいろんなアイデアが浮かぶはずだ。今スポーツ団体でも取り上げられているSDGs(持続可能な開発目標)もそうした発想が必要で出来ることから始めるのが良い。自分のこととして。

(広報担当 水島彰治)

登山月報 第624号  
 定価 110円(送料別)  
 予約年間 1,300円(送料共)  
 昭和45年12月12日  
 第三種郵便物認可  
 (毎月1回15日発行)  
 発行日 令和3年3月15日  
 発行者 東京都新宿区霞ヶ丘町4番2号  
 Japan Sport Olympic Square 807  
 公益社団法人  
 日本山岳・スポーツクライミング協会  
 電話 03-5843-1631  
 F A X 03-5843-1635

山岳雑誌

# 岳人

山と人、時代をつなぐ「岳人」

2021 April No.884 4

花と温泉の山

【特別編集】春山 — 花と温泉の山 —

★モンベルのウェブサイト 全国のモンベルストアや書店にて発売中!

毎月15日発売 価格968円(税込)

年間購読がおすすすめです。

購読割引 送料無料 限定品プレゼント

年間購読なら、お得な価格で毎月お手元に冊子が届きます。

通常価格 12冊  
~~10,560円~~ (税別)

→

年間購読なら 12冊  
**9,680円** (税別)

1冊分おトク!

A4サイズが入る!

**岳人 トートバッグ**

丈夫な帆布製でマイバッグとしても重宝します。

▶サイズ：幅36×高さ37×マチ11cm

**年間購読特典**

全国1,800カ所以上でご優待!

**岳人カード**

全国の温泉や山小屋など提携施設でさまざまなご優待が受けられるカードです。

年間購読のお申し込みはこちらから! >>>

<https://www.gakujin.jp/>

全国のモンベルストアでも受付中!

お問い合わせ

モンベルポスト

☎0120-982-682 / TEL 06-6538-5797

※フリーコールは携帯・IP電話からはご利用いただけません。



# SDGsで、未来をつなぐ

三井住友海上は、安心と安全の提供を通じて、持続可能な社会の実現に取り組みます



## SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS



### SDGs (Sustainable Development Goals) とは

2015年の国連サミットで採択された「持続可能な開発のための2030アジェンダ」に掲げられた包括的で持続可能な社会の構築を目指す「持続可能な開発目標」のことです。

持続可能な地球環境		安心して暮らせる社会		活力のある経済活動	
関連する主なSDGs	主な取組	関連する主なSDGs	主な取組	関連する主なSDGs	主な取組
 12 持続可能な消費と生産 13 気候変動に具体的な対策を 14 海の豊かさを守ろう 15 陸の豊かさも守ろう	・再生可能エネルギーの普及支援 ・自然災害リスクモデルにもとづくコンサルティング	 1 貧困をなくそう 2 質の高いエネルギーを普遍に 3 健康と長寿を促そう 4 質の高い教育をみんなに 5 ジェンダー平等を達成しよう 6 安全な水とトイレを世界中に	・健康づくりの支援 ・先進技術を活用した利便性の高いお客さま対応	 7 質の高いエネルギーを普遍に 8 質の高い成長を促進しよう 9 産業と革新を通じて持続可能な未来を築こう 10 人や国の不平等をなくそう 11 住み続けられるまちづくりを	・次世代モビリティ社会への対応(自動運転車等) ・災害に強いまちづくりの支援

立ちどまらない保険。

**MS&AD** 三井住友海上

三井住友海上は、レジリエントでサステナブルな社会\*をめざします。

\*外部環境にしなやかに対応する、持続可能な社会





# 登山者のマナー 山岳保険

あなたのは山岳保険ですか？

- 傷害死亡・後遺障害     遭難搜索費用     救援者費用  
 傷害入院     傷害通院     傷害手術     日常生活賠償

日山協 山岳共済会

〒170-0013東京都豊島区東池袋3-7-11-707

TEL 03-5958-3396    FAX 03-5958-3397

E-mail sangakukyousai@mbd.ocn.ne.jp

月曜日～金曜日 10:00～17:00 (祝日除く)

携帯からも資料請求ができます。  
<https://sangakukyousai.jp>



WEBからもお申込みいただけます